3．体験を生かした総合学習

―「郷土芸能・安来節の魅力を探る」を通して―

布　野　浩　志

1．講座の基盤

(1)　講座設定の理由

中学校学習指導要領の改訂における教育課程審議会の答申によれば、改善の基本方針の１つに「国際理解を深め、わが国の文化と伝統を尊重する態度の育成を重視すること」があげられている。

本来、文化や芸術についての学習が、直接的には、音楽活動の喜びを味わわせ、感動を得させることをねらいとしていることは言うまでもないが、潜在的には、国際化への対応、すなわち、異文化への理解と対応や、自国の文化や伝統を尊重する態度の育成を、本質的にその基調としていることも明らかである。しかし、これまで音楽科では、我が国の歴史的経過などから、西洋古典音楽の学習に偏る傾向があったのも事実である。

それゆえに、国際理解を深めるという観点に立ち、国際化社会の進展に対応して視野の拡大を図るためには、音楽教育も西洋音楽中心の考え方から脱皮して、アジアなど、その他の地域への音楽にも目を向けると共に、我が国の伝統的音楽文化への理解を深めるための例えば比較音楽学的立場にたった学習などが必要になってくるといえる。

そこで、我々の生活に密着した生きた音楽として存在している郷土芸能「安来節」を取り上げ、学習していくことが、自国の文化や伝統を理解することであり、ひいては国際理解の第一歩につながると考え、この講座を設定した。

(2)　学習活動の工夫

「安来節」を学習するにあたって、「安来節」を実際に歌ったことのある生徒は誰一人としていないのが現状であった。そこで、「安来節」とはどんな歌なのかを生徒たちに実体験させなければ話が始まらないと考え、師範の先生のレッスンを受けることを学習過程のメインにおいた。それは、本物の「安来節」にふれることによって、今までいだいていた「安来節」に対するマイナーなイメージを払拭するだけでなく、新しいものの見方や考え方に気づいたり、自分のものの見方や考え方を見つめる絶好の機会になると考えたからである。

2．目　標

ねらい	**最終達成概念** 郷土芸能の１つである「安来節」を通して、地域や自国の民族音楽（文化）を理解すると共に、諸外国の民族音楽（文化）とのちがいを正しく把握することが、自国と他国の文化を尊重することになる。
自己の見方の変化に気づく 友達の見方のちがいや	**自文化理解** 「安来節」を歌うという今までにない体験を通して、民謡に対する抵抗、偏見を取りのぞくと共に、「安来節」は我が国独特の文化であることを知る。
見方のちがいや共通性に気づく 社会や異世代の人々（対象）の	**異文化理解、人間尊重** 諸外国の民族音楽を視聴、調査し、それぞれの特徴や良さを認めた上で、「安来節」との共通点、相違点を明らかにする。
つけることの大切さに気づく 方をまとめ、自分の生き方を見 自分、友達、対象者の見方や考え	**コミュニケーション、表現力、グローバル的視野** 民族音楽は、昔からその地域に根ざした地域独特の音楽であり、それぞれの国の人々の生活や文化に大きくかかわりをもっていることに気づくことが、自分の視野を広げ、相互に理解しあうことにつながる。

3．体験を生かした学習計画

時	月　日	校　時	活　動　内　容
4・5	7月6日(木)	3・4	○「安来節」(唄) Lesson Part 1．講師　浜崎氏 ・正調安来節についての説明 ・安来節の楽譜（音高表）についての説明 ↓ ・浜崎氏の生の模範演奏 ↓ ・1、2節のLesson 少しずつ区切って、浜崎氏の唄をそのまま生徒に模唱させる。
6・7	7月14日(金)	5・6	○「安来節」(唄) Lesson Part 2． ・Part 1の復習 ↓ ・3節のLesson ↓ ・1、2、3節の通し練習 ↓ ・三味線伴奏をつけての通し練習 ※Lessonの中に随時、数人のグループや個人で歌う機会をとり入れてもらいチェックを行う。
夏　休　み			1．浜崎氏の道場を訪れ、安来節の魅力について浜崎氏やお弟子さんにインタビュー 2．松江市内の公民館活動で郷土芸能を開設しておられるところを訪問。郷土芸能の魅力を調査 3．「安来節」「アジア諸国の民族音楽」について文献調査
8・9・10	9月13日(水)	4・5・6	○　「安来節」(銭太鼓) Lesson （希望者のみ） ・銭太鼓についての説明 ↓ ・浜崎氏による実演 ↓ ・附中バージョンの振りつけ(浜崎氏オリジナル) ↓ ・テープ伴奏にあわせての練習 ※銭太鼓のLessonを希望しない生徒は、各自で調査活動をすすめる。
11・12	9月28日(木)	5・6	○　資料収集、整理、まとめとレポート作り ○　銭太鼓の復習と練習

4．体験を生かした学習の実際

(1) 体験の工夫について

今回の講座のメインは、実際に「安来節」の唄のレッスンを受けることであった。一般的に、物事は何でも、初めの出会いや印象が強ければ強いほど、興味関心をいだいたり、心に深く残るものである。そこで、今回も「安来節」の超一流の演奏にふれさせることがまず大切と考え、講師探しを始めた。幸いにも、本校のＯＢのお父さんが、正調安来節保存会の師範をしておられ、快く講師を引き受けて下さった。（浜崎正人氏）

まず最初に、浜崎先生の生の「安来節」を聞いた時には、その声のつややこぶしの回し方、三味線の独特な音色などに、生徒も一様に驚いていた。そして、それに続いて、譜面（音高表）をもとに、正しい「安来節」の歌い方の練習へと入っていった。最初は緊張やてれくささもあり、なかなか声が出なかった。しかし、浜崎先生が実際に歌ってくださったり、拍子をゆっくり取って下さったので少しずつ声も出るようになり、「安来節」らしくなってきた。１回目のレッスンで１・２節まで進むことができ、最後には三味線にも合わせて歌わせていただいた。同じように２回目もていねいに教えていただき、１・２・３節を生徒全員が何とか歌えるようになった。なかには、１人でしっかりと歌える生徒もおり、生徒の吸収の早さに驚かされた。

実際に「安来節」のレッスンを受けた生徒の感想には次のようなものがあった。

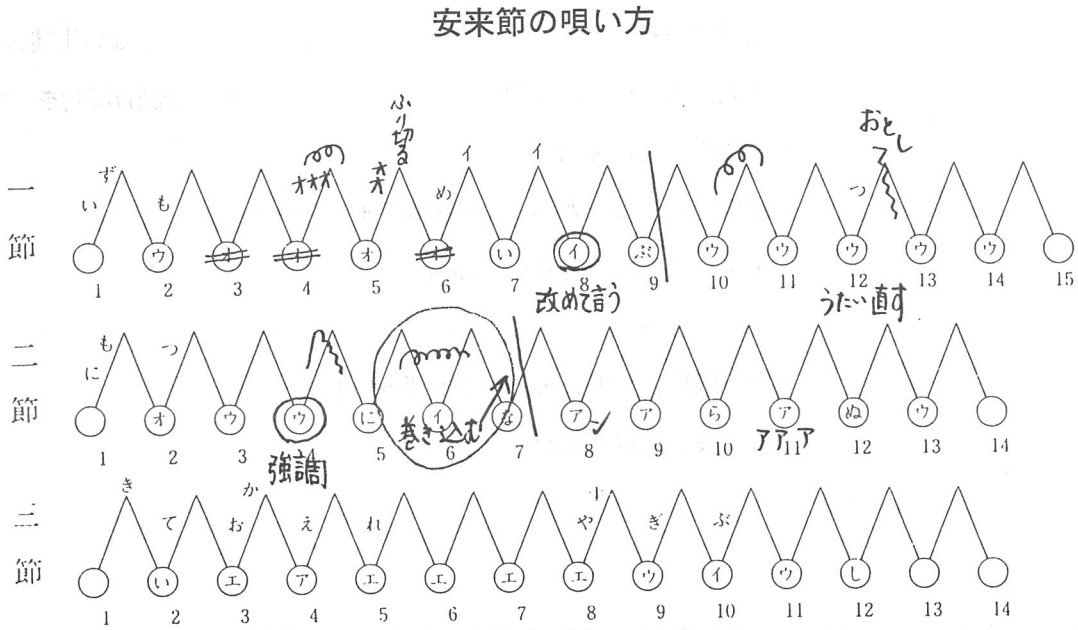
＜１回目＞

- 最初は難しそうでいやだったけれど、歌えるようになったら本当におもしろくなってきた。
- あの先生のこぶしはすごい。さすがプロ。
- 結構難しかった。浜崎先生は「簡単だよ。」っていう顔でやっておられたけど、私は、難しくてついていけなかった。あのこぶしは、世界に通用するのだろうな。
- まだあまりよくわからなくて息も続かない。
- すっごく難しかった。たぶん次の時間までに忘れてしまうんじゃないかな。

＜２回目＞

- けっこうみんな声が出てくるようになって良かったと思う。また、浜崎先生の安来節へのロマンが感じられた。
- 今日を入れて２回しか安来節を歌っていないけれど、実際に歌ってみると安来節はかなりおもしろいと思った。
- ３節目が難しかったけれど、何度も歌っていくうちに自然に歌えるようになったのでうれしかった。
- 三味線の伴奏に合わせて歌わせてもらえたので、いかにも「安来節」を歌っているんだなという気持ちになった。
- 正調安来節が歌えるようになったので、忘・新年会で歌えるかもしれない。
- 安来節を人に少しは教えることができるかもしれないと思った。

図１『安来節を教えていただくために使った譜面（音高表）』



5．学習の成果と課題

「郷土芸能・安来節の魅力を探る」の講座内での体験を通して、生徒はレポートの中で次のように語っている。「考えているだけなら自分たちには遠く、とっつきにくく思える安来節だったけれど、やってみればそんなことはなかった。たしかに音などの点では難しいかもしれないけれど、それ自体入りにくいとは感じなかった。（中略）安来節に対して私たちは食わず嫌いだったと思っている。それはやっぱり、私たちが安来節の正しい知識を持たず、理解していないからだと思う。そのためにも正しい知識を持ちたいと思う。」このように、安来節を歌うという今までにない体験をしたことが、彼らの中にある民謡に対する抵抗や偏見を取り除くことに大きく貢献したと言える。また、安来節自体がわが国の中でも有数の民謡であることに、誇りを感じていることも事実であった。これらのことは、自文化理解の大きな一歩であると思える。

一方、歌から各国の民族音楽の方向に学習を進めた生徒については、次のような感想を述べている。「各国の若者たちが、自分の国や地域の伝統芸能などを好んでいない。だから、私たちの世代の人々が国や地域の音楽をもっと知る必要がある。そして、その文化を大切に育てて、次の世代に受け継ぐことが重要だ。また、国々の芸能文化を知ることにより、他国の事を互いに理解する。それが国際理解の第一歩だと思う。」

このように、安来節を通して諸外国の民族音楽にふれ、異文化理解を深めようとしていることがうかがえるだけでなく、更に今後自分たちにできることは何かといった提言をも述べていることから、ねらいに近づく取組みであったと言えるのではないかと思う。

今後の課題として、今回のように音楽という教科を通しての国際理解というように枠をせばめられると、非常に活動の範囲がせばめられるということである。また、実際自文化理解をすれば、それだけで国際理解といっていいのだろうか、必ずどこか他地域との比較をしなければならないのだろうかなどさまざまな疑問点もあげられる。今後一考を要するだろう。

最後に２人の生徒の感想を述べまとめとしたい。

「国際理解」という言葉を耳にして何を思い浮かべるだろうか。海外旅行やホームステイを思い浮かべる人も少なくないと思う。はっきり言って最初私は、何も思い浮かべることができなかった。なのに私は「国際理解」の講座に入ったのだ。だから初めどういうテーマにすればいいのかなど、あれこれ悩んだ。そうしながらも何とかテーマをきめ、調査を進めていくことができた。今私が考える国際理解はいろいろあるが、私がやったことのような外国の文化と日本の文化の共通点・相違点を発見し、それを受け入れることも国際理解の一つだと思う。外国へ行ったり、外国人と接するだけが国際理解ではない。自分の国だけじゃなくて、他の国のことを知ろうと目を向けることが国際理解の第一歩だと私は思う。

（R・S）

国際理解または国際交流。この二つに関する見方が自分なりに変わってきた。決してこれが正しいとか正しくないということではなく、自分なりにこういうものかな、という感じがほんの少し掴めてきたと思う。でわかったことは、一つではダメだということ。話を聞くだけ、本を読むだけ、ビデオを見るだけ、会って話すだけとか。私はこれでは一方的な解釈しかできないと思う。現に私たちは、本を読んだりビデオを見たりするだけで例えばアメリカのことを全部理解できるのか。気候とか、生活についてだけでなく、文化やそこで暮らしてきた人たちの気持ちまで理解できるのか。話すだけでその国のことをすべて理解できるのか。私は前は本を読んだり、会って話したり遊んだりするのが国際理解や国際交流なんだと思っていたけれど、私はビデオを見ただけで各国の民謡をすべて理解できなかった。本を読むだけで、なんで食事を手で食べるのかがわからなかった。話しただけでその相手の国の人の考えがどこから来たのかもわからなかった。それは、「私たちの文化と異なっている」ということと、何かが抜けていたからだと思う。身近な例で言うと、ご飯を炊いているつもりでスイッチを入れずにご飯がたけるのを待っている、というようなもの。やらないといけないことができていないのに、その先のことばかりやっている。まさに私たちが今までやってきた国際理解・国際交流はこのことではないだろうか。今の私が掴みかけた国際理解・国際交流のし方は「読んで、見て、聞いて、話して、体験する」この五つを全部やってみること。話したり、聞いたり、体験する。この三つはなかなか無理かもしれない。でも慌てて理解することではないと思うので、ゆっくり少しずつ理解していけばいいと思う。以上が今回の学習を通して私が考えたこと、得たことです。

（ふの　ひろし・音楽科）